

高齢者を対象としたオンライン学習推進の試み

桑島英理佳 三瓶千香子

An Attempt to Promote Online Learning for the Elderly

Erika Kuwajima Chikako Sampei

Abstract

Currently, the Life-Long Learning Center of Sakura no Seibo is developing an online course.

As part of this project, we held an “online experience course” mainly for the elderly. This paper reports on the practice of this “online experience course” and examines the perspective of promoting online learning for the elderly. According to the results of the questionnaire survey, they feel anxious to use online learning. Therefore, we identified two perspectives as an approach to alleviate their anxiety. First, the center staff should provide learning support as a familiar model through acceptance and empathy. Second, a follow-up system to keep the students’ learning motivation is important.

Key words : an online experience course, the elderly, anxiety, learning support, learning motivation

序 章

2020年3月以降、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、社会教育・生涯学習分野においても、対面での学習活動の縮小や中止を余儀なくされてきた。現在、学習を継続しようと遠隔学習の方法が模索されているが、なかでもオンラインを活用した学習が注目されている¹。オンラインによる学習の試行が展開されるなかで、オンラインだからこそ参加に繋がったというような好ましい影響も報告されている²。

桜の聖母生涯学習センター（以下、センター）も地域住民を対象に対面による講座を開講してきたが、全国の動向と同じく2020年4～7月までに予定していた講座をほとんど中止とした。そして年間で予定していた約200講座を基本的には開講せずに、オンライン学習を中心とした遠隔講座の開発に注力することに方針をシフトした。それは、この緊急事態を切り抜けるためだけでなく、むしろより多様な人々が時間や移動に囚われることなく学習できる体制を構築したいと考えたからである。感染拡大の第1波が落ち着き始めた頃、福島市内にある学習センターやカルチャーセンターは徐々に再開したが、センターは黙々と開発を進めてきた。その結果、同時双方向型のオンライン講座は小学生や成人を対象とした英会話講座が4コース、DVDによるオンデマンド型の講座は「傾聴ボランティア養成講座(全5回)」が開講されている(2020年12月現在)。

オンデマンド型の講座をオンライン配信ではなくDVD収録にした主な理由は、当センターの主な受講者層が高齢者であり、オンラインを扱える人が少ないと予測したからである。高齢者にオンライン学習を推進していくには段階を踏む必要があるという認識のもと、まずはDVDが扱いやすいと判断した。2020年9月に公表された「第10期

中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理³では、生涯学習・社会教育をめぐる現状・課題の一つとして「Society5.0に向けたこれからの生涯学習・社会教育」を取り上げており、次のように概説している。「インターネットが生活のオプションではなく生きていくための情報を得る命綱にもなり得る時代において、ICT機器を利用できる者とできない者の格差（デジタル・ディバイド）の解消は、住民の安全や命を守ることにもつながる。」また、新しい時代の生涯学習・社会教育の在り方とその推進方策としては、「オンラインによる学び」と「対面による学び」の組み合わせや、デジタル・ディバイドを解消する為にICTリテラシーを身に付ける学習機会を充実させること等があげられている。そして、学びや住民相互の「つながり」により、誰一人として取り残すことなく生きがいを感じられる包摂的な社会の実現を目指すことが述べられている。

今後のセンターにおいても、高齢者が緊急事態下に置かれたり、障がいを持ち来館が困難になったりしても、これまで続けてきた学習や受講者同士の交流をあきらめさせるようなことはあってはならない。オンラインが心身共に健やかに生きていくための命綱であることを理解してもらいたい。このような問題意識から「オンライン体験会」を主催することにし、筆者（桑島）は講師を担当した。初回は、複数の地元メディアが取材に集まり、新聞やテレビ番組で発信されることによって注目を受け、新たな参加希望者も現れた。本稿ではこの「オンライン体験会」の実践について報告し、高齢者を対象としたオンライン学習推進の視点について検討する。

第2章 「オンライン体験会」の概要

第1節 プログラムの概要

「オンライン体験会（以下、体験会）」は、①初心者編 ②技術編（LINE） ③技術編（Zoom）の3つのテーマに分けて企画した。「LINE」はコミュニケーションアプリであり、SNSツールとして国内外で幅広く使用されているものである。「Zoom」はビデオ会議ソフトであり、ビデオ会議に関わる様々な機能が搭載されており操作もしやすいことから、今回の感染拡大の状況において注目を受け多用されている。これらのコミュニケーションツールを用いて今回の体験会を開催する目的としては、センターで開発しているオンラインによる講座や交流に関心を持つことであり、オンラインの利便性を理解し、基本的な操作スキルを習得することを目指した。

運営体制としては、全体の前で講義を行う講師のほか、参加者による操作のサポートを行うサポーターとして当センターのスタッフ2名程度を配置した。また一部の回では、図書館情報センターのスタッフやボランティアの学生にも協力を得ることができた。参加者数については以下で報告するが、各回の定員を10名としたところ上回る申し込みがあった。そこで同内容で増設することにし、初心者編は合計2回、技術編（LINE）は3回、技術編（Zoom）は4回の合計9回を開催することにした。各回の時間は1時間30分とした。また、技術編（Zoom）では体験会終了後に希望者を対象とした練習会も開催し、自宅からZoomを繋いでみるサポートや応用的な技術の指導を行った。合計3回開催し、11名が参加した。なお、練習会の日程に参加できないという3名には後日に個別で対応した。

参加者募集の告知に関しては、まずはセンターの春講座（2020年4～7月に開催する予定であった講座）の申込者376名に対し、葉書やメールを送った。また、履修証明プログラムの受講者やセンターを拠点にして活動している団体「傾聴ボランティアさくら」のメンバーにも声をかけた。さらに、センターのホームページやFacebookにも告知記事をアップした。前述したとおり初心者編の第1回目の取材が発信されたことで、初めてセンター講座を受講するという新規申込者の獲得にも繋がった。以下、各体験会の概要を記す。

(1) 初心者編

【開催日】2020年7月7日(火)、28日(火)

【対象】通信機器を持っていない方

【主な学習内容】①オンラインに関する説明（オンラインで実現可能なこと、メリットについて）②通信機器とインターネット接続に関する説明③Zoomの紹介と体験（各教室に1名ずつ分かれ、当方でセッティングしたタブレットを使用し、Zoomで講師や他の参加者と好きな食べ物や趣味等の簡単な話題で会話をした。タブレットの操作はサポーターが行った。）④オンデマンド型講座のサンプル動画視聴⑤LINEの紹介⑥通信機器の選定に関する説明⑦当センターが開発しているオンライン講座や新しい連絡手段に関する説明

(2) 技術編 (LINE)

【開催日】2020年7月9日(木)、21日(火)、8月18日(火)

【対象】通信機器を持っており、メールとインターネット検索ができる方

【主な学習内容】①LINEのサービスの紹介②使用方法の説明と実践（講師の説明を聞きながら、参加者個人の通信機器を使って実際にプロフィール設定や友だち追加、トークなどの操作を行った。）③当センターの新しい連絡手段に関する説明（これまでセンター、受講者間の主な連絡手段は電話や郵送であったが、LINEを活用することにより、コストもかからず多くの情報を即時に案内できることを説明した。）

(3) 技術編 (Zoom)

【開催日】2020年7月14日(火)、16日(木)、30日(木)、8月20日(木)

【対象】通信機器を持っており、メールとインターネット検索ができる方

【主な学習内容】①Zoomのサービスの紹介②必要な通信機器やインターネット接続に関する説明③実践（各教室に1名ずつ分かれ、当方でセッティングしたタブレットを使用し、参加者がミーティングIDとパスコードを入力してZoomを繋ぎ、講師や他の参加者と会話をした。初心者編と同様に簡単な話題で話し、終了後は退室の操作を行った。）④使用方法の説明（ダウンロードおよびインストール、アカウント作成については冒頭のみ説明し、自宅で資料に記載している手順通りに行うように伝えた。ミーティングに参加する方法、ミーティングを主催する方法に関しては手順を一つずつ詳細に説明した。その他、音量調節等の基本的な操作や、バーチャル背景等の応用的な機能、使用上の注意点についても説明した。）⑤当センターによるZoomを活用したオンライン講座に関する説明

第2節 参加者の属性

参加者は延べ合計72名であった。内訳は、初心者編が15名、技術編 (LINE) が22名、技術編 (Zoom) が35名である。性別を見ると、概ね男性1に対して女性2.5の割合であった。また、年代については概ね60代と70代がそれぞれ約30名と高齢者が大半を占めており、各回においても同様であった。

表1. 各回の出席状況

(単位：名)

講座名	受付数	出席数	女	男
オンライン体験会 初心者編	10	9	7	2
オンライン体験会 初心者編 2	8	6	4	2
オンライン体験会 技術編 (LINE)	9	8	6	2
オンライン体験会 技術編 (LINE) 2	10	9	7	2
オンライン体験会 技術編 (LINE) 3	7	5	3	2
オンライン体験会 技術編 (Zoom)	10	9	8	1
オンライン体験会 技術編 (Zoom) 2	10	10	5	5
オンライン体験会 技術編 (Zoom) 3	8	7	6	1
オンライン体験会 技術編 (Zoom) 4	10	9	6	3
合計	82	72	52	20

表 2. 各回の出席者の年代

(単位：名)

講座名	50代	60代	70代	80代
オンライン体験会 初心者編	0	5	4	0
オンライン体験会 初心者編 2	1	0	4	1
オンライン体験会 技術編 (LINE)	0	5	3	0
オンライン体験会 技術編 (LINE) 2	1	4	4	0
オンライン体験会 技術編 (LINE) 3	0	0	5	0
オンライン体験会 技術編 (Zoom)	1	5	3	0
オンライン体験会 技術編 (Zoom) 2	0	8	2	0
オンライン体験会 技術編 (Zoom) 3	1	2	3	1
オンライン体験会 技術編 (Zoom) 4	1	2	6	0
合計	5	31	34	2

第 3 章 プログラム開発とその実践における創意工夫

第 1 節 アンケート調査集計結果 (抜粋)

「オンライン体験会」の事前・事後に参加者を対象としたアンケート調査を行った (回収率100%)。主な調査項目は次の通りである。

【事前】参加動機、今回体験するにあたって期待すること・不安なこと

【事後】体験会の満足度とその理由、今後のオンラインによる学習や交流に関する希望の有無とその理由、オンラインによる学習や交流を行う際に必要だと思うサポート

調査の集計結果より、体験会の満足度とオンラインによる学習や交流の希望の有無について、全 9 回の結果を合算した割合で示すことにする。まず、満足度は「とても満足」と「やや満足」と回答した割合が83%だった。「とても不満」と「やや不満」の回答はなかった。次に、今後もオンラインによる学習や交流をやってみたいかどうかについては、「強くそう思う」と「ややそう思う」と回答した割合は68%であった。こちらも「ややそう思わない」と「強くそう思わない」の回答はなく、「どちらとも言えない」と無回答以外の約 7 割の参加者はオンラインによる学習や交流に関心があると捉えた。以上の結果から、今回の体験会では、体験学習自体の満足のみにも留まることなく、オンラインによる学習や交流に関心を持つという目的も概ね達成できたと考える。

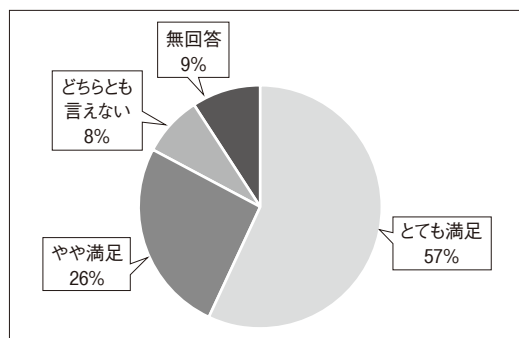


図 1. オンライン体験会の満足度

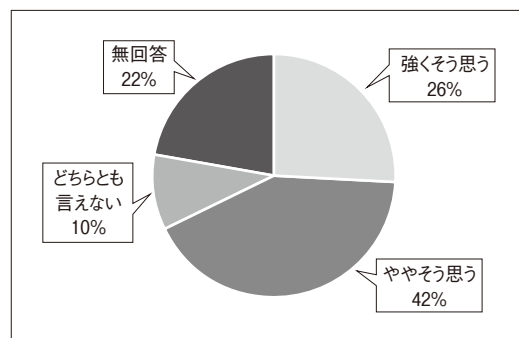


図 2. 今後もオンラインによる学習や交流をやってみたいか？

第 2 節 高齢者を対象にしたオンライン学習推進の視点

アンケートにはオンラインの操作スキルを習得できるか不安だと訴える声が多かった。事前アンケートでは「理解できるか不安」、「操作が覚えられるか心配」という内容のコメントが見られ、事後アンケートには「一人ではなかな

か理解がむずかしい」、「説明だけだとわからないので、一つ一ついっしょにやらないと不安」、「実際にできるようにするためには、何度も個別指導の継続が必要」といった内容が見られた。そしてそれらの不安の背景には、高齢であるからついていけない、学んでもすぐに忘れてしまう、オンラインは若者が使用するもの、オンラインはこわいもの、通信機器は苦手である、といったような思い込みがあることが分かった。

そこで、体験会のプログラム開発や一連の実践を省察し、集計結果の分析を一部援用しながら、高齢者が抱く不安に対しどのようにアプローチしてきたのか、2点を取り上げ概説する。

(1) センタースタッフが講師やサポーターを担当するということ

体験会の講師やサポーターをオンラインの専門家ではなくセンタースタッフが担当したことは、企画や運営に有意に作用したと考えられる。なぜなら、不安や思い込みを抱える高齢者に対して、受容と共感によるアプローチをごく自然に取ることができたからだ。高齢者が不安を語る際は、否定することなく最後まで傾聴することを心がけた。そして、スタッフ自身もオンラインによる会議や講座に関わるようになったのは最近のことであり、かつては苦手意識を持っていたと共感的に伝えたいと、利便性の高いオンラインを学ぶ意義を実体験に基づきながら訴えることができた。また、想定外の質問を投げかけられた際には、正直に分からないと伝えると同時に「では試しに一緒にやってみませんか？」と声をかけ、参加者と共に問題解決に取り組んだこともあった。このようなスタンスによって、参加者はスタッフを自分とかけ離れた専門家ではなく身近なモデルとして認識し、不安をありのまま語り自由に質問することができ、安心して学習に取り組めたのではないかと考える。

「家族には気兼ねして聞くことはできない」と話す参加者は多かったが、体験会においては積極的に講師やサポーターに話しかけている姿が見受けられた。質問は常に歓迎し、たとえ予定していた学習内容以外のことでも丁寧に対応した。サポーターを設置したことで、講師が説明している間も、質問がある参加者には即対応することができた。さらに終了直後には、必ず講師の方から一人ひとりの席を巡り質問や感想を求めた。これらに関してアンケートには次のようなコメントが見られた。「アンドロイドとiPhoneの違いすら知らずに始めて、ドコモ教室にも行ったが、こちらの方がとても良い。」、「子供がいても細かく親切に教えてもらえない。サッカーとやられると自分では出来ない。ここでは皆様が親切丁寧に教えてくれるので、自信が持てます。」これらのコメントはスタッフによる不安に寄り添う学習支援の効果を物語っているのではないだろうか。

さらに、講師が作成した配付資料についても好評を得ることができ、「自分で全部メモを取るのかと思っていたが資料が豊富で大変良かった」というコメントも見られた。ひとりで操作する際に不安を感じることがないように、どこを選択・入力したら良いのかを省略することなく、手順を一つひとつ明示した。ページ数は多くなってしまったが、講師がこれまで参考にしてきた他機関発行の資料と比べてより詳細なものとなった。

最後に参加者のエピソードについて報告する。体験会終了後もいつでも質問に対応すると伝えた結果、早速LINEメッセージや電話などで度々問い合わせがあった。ある女性は電話でZoomの操作に関して何度も申し訳なさそうに質問してきたが、スタッフは毎回丁寧に対応することを心がけた。そしてついに初めて自宅から繋げることができた瞬間、「70歳にもなって新しいことができるなんて思わなかった」と涙を流して喜ぶ姿を画面越しに見せてくれた。このように長期にわたってもあきらめずに学習支援を継続してきたことにより、参加者が生涯にわたって学ぶ喜びを実感したその瞬間を思いがけず共有することができた。このことは高齢者を対象にオンライン学習を推進していくといううえでスタッフにとって強い励みになった。

(2) 学習意欲を継続させるためのフォローアップ体制

アンケートには、オンライン学習を行う際に必要だと思うサポートとして、「もう一度か二度、講習会を開いてほ

しい。」「私には結構盛りだくさんの内容だった。これを入りに、今日のレベルでよいので、何度か講座があると良いと思った。」という要望が見られた。これらに関連して、体験会終了後も個別で質問を受け付けるサポートだけでなく、次のような実践も試みた。

まず技術編（LINE）では参加者全員が講師と友だち登録を行い、その後は質問だけでなく何気ない近況や参加者が撮影した風景写真等が送られたこともあり、丁寧に返信することを心がけた。これは、メッセージや写真を送受信することに慣れる為には相手役が必要だと捉えたからである。何気ない会話を通じて参加者が持つ様々な関心事に触れることができ、またセンターと参加者の繋がりを実感することができ、センターにとって副次的な効果もあったと考える。

次に技術編（Zoom）では、希望者を対象に実際に自宅からZoomを繋いでみる練習会を開催し、実践的な質疑応答を行うことができた。また、体験会よりも十分な時間を取ってオンライン上での会話を体験することができた。この練習会はあらかじめ日程を設定し募集したが、都合が合わない参加者に対しては個別に対応し、誰一人も取り残すことはしなかった。練習会は好評で、同様に練習できる場を継続して設けてほしいと話す参加者もいたことから、次のような試みを行った。当時、センター初のオンライン講座として英会話講座を予定していたが、まずは講師がオンライン操作に慣れるという趣旨の練習会と、受講希望者がオンライン講座を体験するという趣旨のお試し会をそれぞれ開催することになっていた。そこに体験会参加者にも参加を呼びかけたのである。英会話に関心がなくてもオンラインの練習と捉えて参加して良いと伝えたところ7名の参加があり、そのまま正式に講座に申し込む人や、新たに英会話に関心を持つ人も現れた。また、このような実践の機会に参加していくうちに徐々に慣れていき、他の参加者に対して操作のアドバイスを行う人も現れた。

以上のことから、体験会終了後もフォローアップ体制として、実践できる相手と場、および疑問を解消できる機会を継続的に設定することは学習意欲の継続に効果的だと考える。さもなければ体験会での知識習得のみに満足し実践に移らずに終わる可能性もある。また、オンラインに慣れていない高齢者にとって、書籍やインターネットサイトを読むなどして自主学習を行うハードルは高く、何も機会がなければ不安や思い込みから脱却することができずにあきらめてしまうことも容易に想定できる。講師と参加者同士で進捗状況を共有しながら実践することができる学習機会を、適切なタイミングで設定し積極的に呼びかけていくことで、オンライン講座の受講にも繋げていくことができると考える。

第4章 今後の課題

第1節 初心者編プログラムの再構築

今回の体験会は主に春講座の申込者376名に告知したのにもかかわらず、その参加率は約0.09%と極めて低かった。今後より多くの参加を増やしていくことが課題である。次年度は対面講座を再開する予定であるが、同時に体験会も年間を通じて定期的に行い、受講者に直接声をかけて広げていく。特に考慮したいのはオンラインの使用経験がない初心者層である。今回の体験会（初心者編）は本来そのような人々を想定して企画したが、実際参加したほとんどの人が使用経験があった。これは企画のミスマッチが発生したということだ。参加動機としては、通信機器を使いこなせていないから、メールやインターネット検索はできるもののオンラインについて体系的に学びたいから、と語る人が多く、それらのニーズには概ね対応できたと考える。しかしながら問題は、通信機器を持っていなければインターネットやメールの意味も分からない、というような初心者は受講しなかったということである。ここでひとつ、ある高齢女性のエピソードを報告する。彼女はセンターの講座を度々受講していたが、オンラインについては全くの初心者であったので、個別に段階を踏みながら丁寧に説明し、タブレットの使用法の説明まで到達することができた。ところが久々に来館された際に、進捗を聞いてみると「忙しいから使わないことにした」と言われた。成人学習者の特徴を当てはめて考えてみると、おそらく忙しいというのは口実で、自信のなさや不安を見せたくなかったのではないだろうか。ロジャーズ（J. Rogers）は成人学習者の最も著しい特徴として「自分が愚か者に見られはしないか、

なにか失敗をしでかしはしないかという不安」を持っていることをあげている⁴。高齢だからできないという思い込みを持っていることに加え、自分自身であきらめていることを言えない高齢者も多いだろう。よってそのような人々も取り残さない新たなプログラム開発が課題である。

第2節 「学びの共創」によるアプローチ

初心者を含めより多くの受講者にオンライン学習を広げていくための方策のひとつとして、本学の学生や受講者と連携したプログラム開発や学習支援を考えており、これは「学びの共創」⁵として構想してきたもので、これまでいくつか小規模ながらも試行してきた。それらの経験を踏まえ、今後は更なる取組みを実施していくことが課題である。

まず、学生との連携に関しては、高等教育機関が運営する生涯学習センターとして、専門性を持つ教員だけでなく学生という知的資産を巻き込めることは大きな強みである。前述したとおり今回の体験会では、学生ボランティアがサポーターを一部担当し、参加者に対して「デジタルネイティブ」の力を貢献することができた。さらに学生自身も他者に教えることのむずかしさを実感するという学びを得ることができた。地域貢献できる人材を育成しようとする際、在学中に地域住民と相互に交流し学び合う経験は必須である。また、成人学習の現場を体験することは学生自身が生涯にわたって学ぶという態度を育成するうえで有効である。このように学生を巻き込んでいくことは、両者が相互に刺激を与え合う機会を創り出すことができる。

次に参加者同士の相互学習にも着目したい。参加者のなかには、体験会や練習会への参加を重ねるうちに操作のアドバイスをし出す人が現れた。また、IT分野の職業経験を持つという参加者もいた。そのような参加者が学習支援に携わるようになれば、不安やプライドを併せ持つ高齢者に対し、センタースタッフよりも対等な立場からアプローチできる可能性があるだろう。イギリスではシニア層・高齢者層のICTスキル習得支援のために、行政と連携した「デジタル・チャンピオン」というボランティアが活動しており、岩崎はその役割に求められていることについて「必要に応じて、初歩的助言を身近に気軽に受けられるということ」と報告している⁶。日本においても自治体やNPOでICTボランティアが養成されているが、これらの事例に学び将来的にはスタッフ、学生、受講者による学習支援グループを組織化していきたい。

第3節 フォローアップ体制の強化

今回の体験会では、体験学習自体の満足のみで留まることなく、オンラインによる学習や交流に関心を持つという目的も概ね達成できたと結論づけた。しかしながら、体験会が終了して半年以上が経過し、参加者たちは現在どのような状態にあるだろうか。継続してオンラインに対する関心を持ちながら使用しているのだろうか。また、技術編（Zoom）参加者のうち練習会に参加しなかった人々の要因を知りたい。もちろん自分でできると感じたから参加しなかったということは考えられるが、それ以外にどのような要因があったのだろうか。今後、追跡調査を行い実態を明らかにすることで、参加しやすいフォローアップの学習機会について再考することが課題である。さらに、今回は英会話というテーマの独自性が強いオンライン講座の練習会やお試し会もフォローアップに充てたが、操作の練習はしてみたいと思いつつも気後れして参加しなかったという人は多かったのではないかと予測している。よって今後は気を張らずに参加できる機会をいくつか設定することもセンターのミッションである。前述したとおり学生や受講者、あるいは他機関と連携を取ることで、より多様なバリエーションを持つことができるだろう。

終章

本稿では、高齢者を対象としたオンライン学習推進の視点として、高齢者の不安に着目し、軽減するための対策について検討してきた。これまでオンラインに触れる機会が少なかった高齢者に対し、早急にオンライン学習を推進し

意識変容を促していかなくてはならない。その手がかりとして、受講者をセンター講座の企画運営に巻き込むという考えをもう一度強調してまとめとしたい。受講者もさることながらセンターのスタッフも、パラダイムシフトに対応し、ニューノーマルを創造し合いながら新しい未来に向かって歩んでいかなくてはならない。そこで、スタッフが受講者に対して次の3つのメッセージを発信していくことは有効ではないだろうか。第一に、共にこの社会の変化を乗り越えようということ。第二に、共に新しい学習方法を学ぼうということ。第三に、共に新しい学習を創造していこうということである。体験会終了後も練習会やお試し会を開催したと報告したが、その際スタッフは参加者に対して、良質なオンライン講座を開発する為に率直な意見を教えてほしいと呼びかけてきた。これは、単に受身的な感想を伝えてほしいという意味ではなく、参加者自身もオンライン講座を開発する一員であるという当事者意識を意図的に芽生えさせることで、オンライン学習の意欲を喚起しようとしたのである。このように、文字通り受身の受講者と考えのではなく、センター講座の企画運営に巻き込んでいくことに、意識変容が生じる可能性があるのではないだろうか。そうであるとするならば、オンライン学習推進の要はスタッフが受講者の不安に寄り添い、積極的に絆を築こうとする態度だと考える。それはセンターが小規模で地域密着型だからこそできることであろう。

新型コロナウイルス感染拡大による危機的状況は図らずもセンターの新しいフェーズを切り開いた。開設36年目の今、改めて「共にある心」という設立理念に立ち戻り、今後も高齢者の学習支援を強化していきたい。センタースタッフが身近なモデルとして常に学び変容しようとする姿勢を発信しながら、スタッフ、学生、そして受講者とのラーニング・コミュニティを形成する。そして生涯学習推進の深化を目指していくことが新しいフェーズにおける大きなミッションである。

脚 注

- 1 例えば、あらかじめ収録、編集した動画を配信するオンデマンド型の学習としては、自宅のできる体操や料理、工作等の講座動画が動画共有サイトを通じて配信されている。また、ビデオ会議ソフトを活用した同時双方向型の学習としては、語学、体操、まちあるき、見学会、文化祭、居場所、自習室等、こちらも多岐に渡って展開されている。同時双方向型のオンライン学習では、特に社会教育分野で重要視されてきた学習者同士の話し合い学習も可能であり、小グループに分かれて話し合うことや、オンライン上の付箋やホワイトボードといったツールを活用しながら議論の流れを視覚化し、共有することも行われている。
- 2 例えば、福井県高浜町和田公民館では、施設に入居している高齢者がオンラインによる体操教室に参加することができたことを報告している。参照：文部科学省総合教育政策局「多様な主体の協働とICTの活用で、つながる生涯学習・社会教育～命を守り、誰一人として取り残すことのない社会の実現へ～「第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」を踏まえた事例・施策集」文部科学省、2020
<https://www.mext.go.jp/content/000077177.pdf>、(閲覧日：2020年12月30日)
- 3 中央教育審議会生涯学習分科会「第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」文部科学省、2020
https://www.mext.go.jp/content/20201013-mxt_syogai02-10074_01.pdf、(閲覧日：2020年12月30日)
- 4 J. Rogers (藤岡英雄監訳・徳島大学生涯学習研究会訳)『おとなを教える』学文社、1997、17頁
- 5 三瓶千香子「小さな短大が地域に開くということ」『大学はコミュニティの知の拠点となれるのか』上杉孝賓他、ミネルヴァ書房、2016、163頁
- 6 岩崎久美子「高齢者のデジタル活用支援の事業構想：英国事例を参考に」『社会教育 887号』一般社団法人日本青年館、40～41頁